

生徒に伝える東洋英和の歴史

中高部元教諭 浜野浩一

まえがき

創立100周年を記念する生徒の企画 1984年、創立100周年を迎えて、学院あるいは中高部行事としての様々な祝典が、11月6日の式典を中心に準備されていた。短大かえで祭・小学部美術展などはこの週に開かれたが、中高部生徒会の第16回楓祭^①は、100周年を祝う行事ではあるものの、他の祝典・行事の会場の関係もあって、例年通りの10月10日前後の日程で行なわれた。

中高部では楓祭とは別に、学院の祝典に接しての“生徒の記念祭”があるべきであろうとの考えから、この年度の初頭に、清野礼教諭を長とする臨時の記念行事委員会が設けられた。7月には生徒会役員会とのジョイント委員会としてC.C.C. (Centennial Celebration Committee) が発足した。C.C.C.の企画の主旨は、

100周年を楽しく祝うと共に、この機会に遇うことのできた私達は、東洋英和の創立の精神を理解し、百年の恵みに感謝し、いまだ恵まれない世界の人々を憶えよう。というものであった。

C.C.C.の企画の第一は「東洋英和の歴史を学ぶ」講演会である。9月初旬のHRの時間を充て、中・高それぞれ全生徒を対象として、現職教諭を講師とする講演会であった。講師は朽木久子教諭(司書、史料室委員)が資料に遺されている英和の歴史の側面について、私は「日本近代史の中の英和の歩み」について担当することになった。

企画の第二として、楓祭公開日に続く10月11日(木)には、インドシナ難民の救済に挺身している谷沢一江氏(昭36高・38短大英卒)の講演会が催された。

第三はC.C.C.の企画の目玉である。中高部記念運動会の翌10月31日(水)は、生徒が創立100周年を祝うお祭の日として「記念祭」が行なわれた^②。縁日・お化け屋敷・喫茶店など一日を楽しく過し、その収益はすべてインドシナ難民救済活動のために献げられた。

注解① そのスローガンは、「第2世紀の扉を開こう — 今こそ前進の時、みんなで力をあわせて100周年を — 」であった。

② 中高部生徒会誌『楓』28号(1985)

東洋英和を学ぶ として、9月の講演会である。朽木久子教諭は、中学部生徒に対しては、村岡花子^③を通して、明治末年ミス・ブラックモア(III)校長時代の寄宿舎の生活が紹介された。高等部生徒には、卒業生で佐々木信綱門下の女流歌人として高名であった片山広子^④について、寄贈された資料を通じて明治中期の東洋英和が語られた。これら講演の内容は、『百年史』の記述にも活用されているところである。

講演会で私が担当する「日本近代史の中での英和の歩み」は、実は宿構である。

1954(昭和29)年10月、私は創立70周年の祝い

に沸く東洋英和中高部に非常勤講師として着任した。自らの学生生活を顧みて、校舎の佇まいといい、毎朝の礼拝、「ごきげんよう」の挨拶にいたるまで、毎日が驚きであった。間もなく、刊行されたばかりの『七十年誌』を渡された。当時、男子教員は $\frac{1}{4}$ であった中高部で事々に戸迷う新任の男子教員は、音楽の富岡正男教諭に何くれとなく世話になった。その富岡教諭が、「浜野君、これは井上先生が大変なご苦労でまとめ上げられたんだよ。君は師範出だから学校のことはよく解っているだろうけれど、これをよく読んで、東洋英和を勉強しなさい」^⑤と言葉をかけてくれた。

着任早々『七十年誌』に接したことは、私が東洋英和に腰を据えることになった理由の一つである。「英和はなみ大抵の学校ではない」という思いを深めた。長野院長に大いに売り込んで、翌年専任にして頂いた。数年後、ガリ版B4版1枚に「東洋英和女学院略年表」をまとめ、それをテキストとして日本史の授業に使うことにした。60年安保のころから約20年間、担当した高等部日本史の最終の授業(100分)は、今回の演題そのままの「日本近代史の中の英和の歩み」であった。

恵まれてここに学び、卒業していく生徒たちが、名門東洋英和の卒業生という看板に負うてのみ生きるのではなく、何が名門の名に値するのかを、先人の苦闘の中から学んでほしかったからである。また、それを語ることは、社会科教師としての義務であるとの思いもあった。

この数年間、高等部の授業を担当することが少なかった私にとって、退職を半年後にひかえたいま、全校生徒に対して英和の歴史のひと駒を語る機会を与えられたことは、何とも嬉しいことであった。同僚に「大学の退官記念講義のようなものですな」と云われて、万更でもない気分であった。

注解③ 村岡花子 1893~1968 1913年、旧高等科卒。児童文学者。『五十年史』編集に関わり、理事・評議員を勤める。戦後、婦人運動・評論に活躍。短大保育科講師を勤める。晩年、多くの著書・資料を図書室に寄贈。『百年史』p.160~164, 445~449。

④ 片山広子 1878~1957 『百年史』p.156~160。

⑤ 『七十年誌』は刊行後約10年、新任教師にオリエンテーションの中心資料として配布された。

なぜ東洋英和女学校なのか 講演の内容は、細部においては中・高それぞれに応じて取捨したが、共通しての中心主題は、「東洋英和はなぜ女学校だったのか」にしばった。

旧制の女学校といえは、ふつう〇〇高女であった。これに対して、東洋英和は、いわば各種学校にあたる高等のつかない「女学校」の名称を、第2次世界大戦末期に院制を施行するころまで^⑥60年にわたって固執してきたのはなぜか、ということである。戦前に東洋英和を卒業した先輩たちは、何を求めてここに学んだのか。このことを歴史的に理解した時、生徒たちは、選ばれて東洋英和に学ぶことに矜恃と恩恵を覚え、伝統に光を加えるものとして成長するであろう。

注解⑥ 1919年、本科を高等女学科と改称したが、それは前年の東京女子大学の創立と関わる。『百年史』によれば1941年、校名の「英」を「永」に変え、さらに大戦末期の1944年、学則から「キリスト教教育」を外し、高等女学校令による女学校になった。(同書 p.330~331)

東洋英和の歩み — 近代史の否みの中で —

東洋英和 創立者ミス・カートメルについては創立記念日ごとに語られる。東洋英和の創立のころ、プロテスタントのミッションスクールで、「英和」を名乗る学校は数多い。^⑦最近まで、英和といえば、東洋英和女学院と静岡(1887)・山梨(1889)の姉妹3校である。

「東洋」を冠した理由は、『五十年史』・『七十年誌』の何れも記すところがない。本来「東洋」とは、幕末に西洋近代文明に触れて、西洋に対応する概念として東洋が認識されたのではないか。幕末の開明的儒者佐久間象山^⑧は、「東洋の道德、西洋の芸(科学技術)」と云い、東西文化の融合を目指しつつも、朱子学倫理の優越を主張している。1880年代、自由民権運動の高揚の中で、「東洋」は民権派が好んで用いた。東洋自由新聞(1881)^⑨、代表的な私疑憲法である植木枝盛の東洋大日本国国憲按(1882)があり、大隈重信が結成した立憲改進黨(1882)も、その前身は東洋議政会と云った。民権派が好んで東洋を称えたことの中に、アジアで最初の立憲国家を目指しつつも、西洋に対する幕末の尊攘論の影が、そしてやがて東洋の盟主としての志向が微妙に窺える。

東洋英和について云えば、『七十年誌』によれば、王女会(1888)が孤兒院など社会事業団体への寄附献金のほかに、「会の収入の1割が支那伝道資金として送られた」(同書p.70)とある。

東洋、即ちアジアの近隣諸国に対して、既に1885(明治18)年、かの福沢諭吉でさえ、いまだに近代化に踏み切ることができない支那(中国)朝鮮のような「亜細亜東方の悪友を謝絶」し、「西洋の文明国と進退を共に」すべし^⑩、と断じている。このとき支那伝道を支えようとした東洋英和の姿勢に、時代の風潮を超えた何物かを感じる。

注解⑦ 東京英和女学校(青山女学院の一前身)、横浜英和(済美学園)、神戸英和(神戸女学院)、福岡英和(福岡女学院)、フェリス英和女学校など。

⑧ 佐久間象山 1811~64 信州松代藩士。蘭学・砲術を学び、江戸に塾を開いて勝海舟・坂本竜馬・吉田松陰らを育てる。開国論を唱えて暗殺される。

⑨ 東洋自由新聞 西園寺公望・中江兆民らが主宰。フランス流急進の民権論を展開したが、新聞紙条例(1875)により34号をもって廃刊。

⑩ 福沢は、時事新報(1882)を創刊・主宰した。はじめ官民調和を主張したが、しだいに国権伸長に傾いた。ここに掲げた所説は、福沢が1885年3月、時事新報寄せた「脱亜論」なる小論。

明治期の新聞より

東京の私立女学校

(一六六東京日日)東京府下の私立女学校は二十餘校もあるべきが中に就て著名なるものは左の如し
 明治女学校(名譽)
 學科英語所在地位田町三丁目。生徒數二百十七人。原校長木村熊二。
 共立女子職業學校(名譽)
 學科裁縫所在地一ツ橋通。生徒數二百四十八人。原校長服部一三。
 成立學舎女子部(名譽)
 學科英語所在地駿河縣袋町。生徒數二百十人。原校長中原貞七。
 東洋英和女學校(名譽)
 學科英語所在地麻布區居坂町。生徒數二百五十人。原校長平岩

キリスト教と国家主義・国粹主義 東洋英和女学校創立の年1884(明治17)年は、鹿鳴館^⑪時代のさ中であり、また秩父事件にみられるように、民権運動の坐折期に当る。

この年、海老名弾正・中村正直らと並ぶ明治初期プロテスタント伝道の主導者植村正久^⑫は、『真理一斑』を著した。民権家がおろそかにしていた人間性の価値を教え、真の自由は、政治的自由を超えた精神の自由にあると説いた。この書は近代

文学の先達たち^⑬に深刻な影響を与えた。

一方、福沢の思想的転回にもうかがえる風潮は、教育界においては1886（明治19）年の帝国大学令以下の学校令の制定によって、明確に国家主義の方向をとることになる。さらに1887（明治20）年以後になると、条約改正運動の停滞もあって、政府の欧化主義政策を批判する国粋主義の運動がにわかには活発になる。その運動の中心団体である政教社^⑭の同人のひとり井上円了^⑮は、キリスト教の反国家性をきびしく批判した。

1889（明治22）年2月11日、欽定憲法として発布された大日本帝国憲法によって、日本はアジアで最初の立憲国家になった。しかしその憲法は、近代憲法において不可欠の人権の保障について必ずしも充分ではなく、天皇を頂点とする国家主義の色彩の強いものであった。翌1890（明治23）年、議会開会に先立っての教育勅語の発布は、教育界における反動的な国家主義・国粋主義の昂揚、キリスト教批判に一大機会を与えることになった。

1891（明治24）年1月、内村鑑三のいわゆる不敬事件^⑯が起った。井上哲次郎は^⑰『勅語えんぎ衍義』（1891）・『教育ト宗教トノ衝突』（1893）等によって、キリスト教は反国体的であると断じ、内村と論戦を展開した。

日清戦争（1894～95）のころ、反キリスト教の風潮は一段と高まり、東洋英和女学校も在校生が100名に減じた。これまで平民主義を唱えていた徳富蘇峰^⑱は、日清戦争後の三国干渉を機に、自ら告白するように国権主義に「転向」している。

注解① 鹿鳴館は、英人コンドルの設計で1883年に日比谷（現・日生劇場の地）に建てられた社交場。条約改正を促進するため政府がとった欧化政策の象徴。

② 植村正久 1857～1925 江戸の人。横浜で米人ブラウンに学び入信。1887年現

・富士見町教会を創立。評論・神学論の業績は大きい。同時代の海老名弾正（1856～1937）が日本主義を唱え、能弁な説教家として知られたのに対し、植村は正統派福音主義の信仰に立ち、その説教は「訥弁の雄弁」と評された。

⑬ 北村透谷・木下尚江・島崎藤村・正宗白鳥ら。

⑭ 政教社は1888年、三宅雪嶺・志賀重昂・杉浦重剛らを同人として雑誌「日本人」を刊行。はじめ高島炭鉱坑夫虐待問題を世論に訴え、ナショナリズムの健康性を示すが、のち反動的な国家主義に傾く。

⑮ 井上円了 1858～1919 仏教哲学者。1887年、哲学館（東洋大学）をおこす。

⑯ 内村鑑三（1861～1930）は高崎藩士の子。札幌農学校在学中入信、渡米。第一高等中学校講師のとき、教育勅語への拝礼を拒んで職を追われ、のち「万朝報」によって日露戦争中も非戦を説く。

無教会主義を唱え、「愛すべき二つのJ」に仕えることを念願した。

⑰ 井上哲次郎 1855～1944 哲学者・東大教授。国民道徳の作興を唱え、晩年儒教研究に没頭。

⑱ 徳富蘇峰 1863～1957 熊本県生れ、芦花の兄。熊本洋学校に学び、海老名弾正・小崎弘道らと花岡山に奉教を盟約、同志社に移り中退。1886年、民友社をおこし、「国民の友」（1887）・「国民新聞」（1890）に拠って平民主義を主張。

文部省訓令12号 日清戦争の直前、1894（明治27）年7月、明治外交の悲願でもあった第1次条約改正（治外法権の撤廃）はついに成った。欧

化政策は放棄された。改正条約は1899（明治32）年7月実施、外人の内地雑居が始まることになった。政府はこの際、外人の学校経営を禁止したい方針と併せ、学校教育からキリスト教主義を排除する意向を強めた。

1899（明治32）年2月、中学校令・実業学校令・高等女学校令^{①9}が、8月には私立学校令が公布された。そして私立学校令を補足する法令として、文部省訓令12号を公布した。

文部省訓令12号は、大日本帝国憲法第28条に、制約つきながらも「日本臣民ハ……信教ノ自由ヲ有ス」と規定されているにも拘らず、すべての学校における宗教教育・宗教的儀式を禁止したものである。すべてのミッション・スクールは存立の危機に立たされることになった。^{②0}

東洋英和女学校の隣接番地、崖の上に同じカナダ・メソジスト教会の一般伝道会社が経営する男子校東洋英和学校があった。現在の麻布学園である。山の学校と呼ばれて、教員には女学校と兼務する者もあったという。宗教教育禁止の事態に際して、男子の東洋英和学校はキリスト教を捨てて、公の認可を得た麻布中学校となった。^{②1}

注解^{①9} 高等女学校は、既に1882年設立の東京女子師範学校付属高等女学校などがあり、1895年には高等女学校規程が公布された。

^{②0} 訓令12号およびその影響・対応については『百年史』p.92-99 に詳しい。

^{②1} 『百年史』によると、男子の東洋英和学校の分身として既に1895年、麻布尋常中学校を設立。1900年に麻布本村町に新築移転して、ミッションとの関係を断った。東洋英和学校普通科はこの年、神学部は翌年閉校したとある。（同書 p.26～28）東洋英和学校

東洋英和女学校の確立者 ミス・ブラックモア
文部省訓令12号に対して、東洋英和女学校はキリスト教主義を貫いた。即ち、公認の高等女学校であることを放棄して、敢て各種学校の道を選んだ。^{②2}

校長はミス・ブラックモアの第Ⅱ期（1896～1900）の時代にあたる。ミス・ブラックモアは1890（明治23）年から1925（大正14）年の間、4期、通算16年にわたって校長をつとめた。歴代校長の中でもとりわけ逸話が多く、『五十年史』・『七十年誌』の何れにも記すところが多い。^{②3}多くの逸話の何よりも、文部省訓令12号に対して、敢然とキリスト教主義学校としての東洋英和女学校を確立したのは彼女である。

このころ、政府が不安感を抱いていた条約改正実施後の日本社会は、キリスト教主義学校にとっては、逆に学校発展の好機として捉えられていた。現在の校地を獲得し、この年1899（明治32）年には校舎新築が進められていた。ところが9月8日、建築中の校舎は台風によって倒壊した。再建中の校舎は、翌月またも台風によって倒壊したという。『七十年誌』は、

窓から見て泣き出した生徒達の前に、ミス・ブラックモアは床に伏して祈っていたが、やがて顔をあげて「雨のあとに虹が出ます。恵みの虹を信じましょう」と諭した。（同書 p.17）と記している。そしてこの節の冒頭聖句、

「人には能はねど、神には然らず。夫れ神は^{すべ}凡ての事をなし得るなり。」 マルコ伝10-27

当時女子教育の最高学府は東京女子高等師範学校（1980創立、現・お茶の水女子大学）であった。東洋英和女学校で5年制高等女学校と全く同等の本科5年の課程を卒えた者は、東京女高師への受験資格を持たなかった。反面、キリスト教教育や、公の枠組みに縛られない自由な特色ある教育内容

を確保してきたと云える。

注解⑳ 『百年史』によると、9-14 東京府知事あて「目的更生開申」を提出、学校の目的に初めてキリスト教主義を明記したという。(同書p.92-99)

創立以来、目的(学則第1条)に「キリスト教主義に基き」と記されていなかった理由は、1873年の世に謂うキリスト教解禁は、実は切支丹禁制の高札を撤去しただけの、いわば黙認の状態であって布教公認の法的根拠がなかったことによると思われる。

㉓ 『百年史』p.255～260ミス・ブラックモアの人と業績

東洋英和の発展 大正デモクラシーの時代に入る。ミス・クレイグが2期、通算7年校長の責にあつた。『七十年誌』は、クレイグ校長の時代を「東洋英和女学校の黄金時代」(p.33)という。『七十年誌・年表』によると、1911(明治44)年、日本基督教会同盟成立、1912(明治45=大正1)年、内務省は各宗教代表を招いて懇談、翌年には文部大臣が各宗教教職代表と懇談とある㉔。

大正に入ったころの東洋英和女学校は、6年制の小学科㉕ 5年制の本科、3年制(英語部は4年)の高等科によって成り立っていた。創立30周年に当る1914(大正3)年に、附属幼稚園を設置。

1918(大正7)年3月、本科は4年制高等女学校同程度と認定され、翌年4月から、本科は高等女学科(高女科)㉖と改称された。

注解㉔ 『百年史』には関係記述なし。1912年には、仏教各宗派の懇話会・日本基督教会同盟の大会が開かれている。

㉕ もと幼稚科と予科4年で、1904年に小学校同程度と指定される。1907年小学校

令が改正され、義務教育6年制となった。創立25周年に当る1909年7月、6年制の小学科とする。

㉖ 1929(昭和4)年2月、高女科は5年制高等女学校と同程度と指定される。

東京女子大学と東洋英和 日英同盟(1902)
・日露戦争(1904～05)・条約改正の完成(1911)
・第1次世界大戦(1914～18)と、日本が国際社会の重要な一員として登場するのと並行して、キリスト教に対する不当な圧力は徐々に緩和されてきた。

1918年(大正7年)4月に東京女子大学㉗が新設され、東洋英和女学校高等科はこれに合併され、ここに高等科の歴史を閉じることになる。東京女子大学設立の事業は在日プロテスタント6教派合同で進められ、京浜地区のミッション女学校教員の高等科が合同して、キリスト教主義女子教育の最高機関㉘として設立された。と云っても、東京女子大の創立に中心的役割を果たしたのはカナダ・メソジスト教会であり、東洋英和女学校であった。

東京女子大学は、理事長ミス・ブラックモア、初代学長として新渡戸稲造㉙を迎え、安井てつ㉚が学監をつとめた。安井は新渡戸のあとを承け、1923(大正12)年から1940(昭和15)年まで東京女子大の学長をつとめた。また、理事として、東洋英和女学校のその経営に関わった。

注解㉗ 『百年史』p.205～206 東京女子大学の創立

㉘ この年、1918年12月に大学令が公布され、明治大学・法政大学等が、専門学校資格から正式に大学の資格をもつことになった。しかし女子教育においては大学令は適用されず、日本女子大学(1901)・

東京女子大学は専門学校令による学校であった。

- ②⑨ 新渡戸稲造 1862～1933 岩手県生れ。札幌農学校で入信、欧米で農政・経済を学び、一高校長・東大教授等を歴任。東京女子大学長就任後、1920～26年国際連盟事務局次長、帰国後貴族院議員、カナダで客死。
- ③⑩ 安井てつ 1870～1945 東京に生れ、1890年、東京女高師第1回卒業生。英国留学。在欧中に新渡戸に接し、1900年海老名弾正より受洗。東京女高師・シャム王室女学校・学習院・津田塾等に教え、1918年当時既に高名な教育家であった。伝記に「安井てつ伝」東京女大同窓会（1949岩波書店刊）がある。

遣わされし者 安井てつ 戦争の足音は急速に迫っていた。キリスト教会は再び受難の時を迎える。

1941（昭和16）年3月、最初の日本人校長（1938～）小野直一の病気により、理事安井てつは、永和と改称したばかりの東洋英和の顧問として、校長代理長野彌を扶けた。在日宣教師は、すでに

あ と が き

風化していく先人の業績 『七十年誌』に、元教諭吉本てうは「四十年の学校生活を顧みて」（同書p.164～167）と回想を遺し、とりわけミス・ブラックモアと安井てつについて記している。

安井先生については親しく接した人が多いので多くを語るを要しないと存じます。

としながらも、安井の強烈な責任感と東洋英和が受けた「この恩義は決して忘却することの出来な

母国に引揚げていた。さらに翌年11月に退職した校長脇山司家太の後任として、理事会一致の懇請によって、安井は校長（事務取扱）に就任した。既に73才の高齢であった。

このころ戦局は既に急を告げ、高女校生徒の大部分は勤労働員で登校しなくなっていた。英和の教育活動は崩壊の危機にあった。

1944（昭和19）年11月、安井は雑踏する西荻窪駅で転倒して大腿骨を骨折、翌年さらに骨折を重ねて入院中、余病を併発。終戦後の1945（昭和20）年12月、天に召された。

老軀に鞭打って東洋英和の危急に臨み、壮烈とも云えるその死であった。

高等部図書室に、安井の遺蹟が掲げられている。^⑪

はたらきびと
収穫はおほく 労働人は
少し この故に収穫の主は
労働人をその収穫場に
遣し給わんことを求めよ

哲

マタイ 9：37～38、ルカ10：2の聖句である。

注解⑪ 現高等部教頭清野礼教諭が東京女子大助手時代に関係者から贈与され、さらに図書室に寄贈された。

いもの」であると述べている。創立70周年（1954年）の時点では「親しく接した人が多く、多くを語るを要しない」ことであっても、いま東洋英和女学院の視点から校長安井てつについて書かれたものは、殆どない。この回想を寄せた吉本てうや、『七十年誌』に「校歌」について書いている鶴沼幸など、きびしい戦争をはさんで、半世紀以上にわたって英和を支えて来た人々の記憶は、いま風

化しようとしている。

『百年史』に載せられている「昭和20年頃在職の教職員」の写真(同書p.384)は、『七十年誌』に、

惨憺たる四囲の情勢の中に、家族も家も顧みず、殆んど学校に在って今日まで母校を守り抜いて来た長野高女校長をはじめ教職員は七月二十四日、この母校を死所と定め、正面玄関に於て記念の撮影をした(同書p.49)

とある写真そのものではなかろうか。

死所と定めて守った母校で、その多くは既に故人となったこの人々が、戦後の新学制のもとでどのように東洋英和を伝えて来たか。『七十年誌』以後、即ち1955(昭和30)年からの約15年間は、まとまった校史の中で人について語られることが少い。⑳

注解㉑ 『百年史』は、新学制に転換する1947(昭和22)年のころの記述に、高女校長長野彌と、教務主任井上健之助についてのみ注解を付している。

長野・井上時代を遺す 昨年7月14日、奥興牧師㉒の三軒茶屋教会の新会堂献堂式が行なわれた。式後、最近定年退職された元教諭川島京子・中野登美子・景山暁美の諸姉が、教会に近い我家に立寄られた。英和の長野院長時代の話題に花が咲いた。

戦後、高等部の関西修学旅行が行なわれていたころ、京都の宿に到着した折、まめまめしく指示する長野院長が小使いさんに間違われ、特に許されて新調のスーツで楽しみに同行した用務員の新井のおじさんが校長先生にされた話など。4人で笑いころげながらも、長野先生の、律儀で、温くて、細やかで、大きくて、愛唱の讚美歌536番のままに生きた長野先生を偲ぶ一時であった。

飄々として「胃の上は食道だよ」と、生徒に人

気のあった蜀堂井上健之助先生。吉本先生・鶴沼先生はもちろん、早朝、教員室でひとり膝まづいて祈っていた丸山民子先生。おばあちゃんのお愛称をもつ小柄できびしい岡本あき先生。長野先生をよく扶けた英和の窓口菱谷マツ先生。四十代の若さで急逝したズーさん、佐々木孝男君のご長女順子さんが、昨年、英和短大英文科に入学したと聞くとき、深い縁を感じる。

野尻のトミソングの富岡正男先生とは、昨年暮に中高部母の会のクリスマス礼拝に招かれた折に同席した。その折富岡先生は、

「きみ、長野先生は英和中興の祖だよ」という。

井上健之助先生の遺稿・回想は、ご長女の内藤みどり先生(中高部非常勤講師)が1978(昭和53)年に『井上蜀堂集』として刊行された。

「中興の祖」長野名誉院長については、ご逝去の後の『東光』㉓20('83.6)・『母の会だより』㉔51('83.7)・『敬和会』会報㉕37('83.3)㉖38('83.7)等に多くの追悼・回想が寄せられている。

また100周年記念事業として、『東洋英和新聞』・『楓』の合冊本がまとまり、史料としても整えられている。

長野・井上両先生を中心に、多くの長老的先達が、英和独特の温かさを培ってきたことを知る私たち後輩は、さらに後輩に当る若い教師・生徒に優れた先人の事績を伝えることによって、東洋英和の伝統を守り育てていく責任を思うのである。

注解㉗ 奥興は1954年当時宗教主任として、『七十年誌』に「宗教教育七十年」を書いている。

(あとがき) — 小学部 竹井・張替 —
創立101年、学院も二世紀に入った。元中学部教頭の浜野浩一先生が昨年、停年退職され、現在もご多忙の中を快く執筆下さり感謝に耐えませんが、